



北小の伝統行事「筆供養」 ～鉛筆に感謝の気持ちを込めて～

4日、児童会の行事として「筆供養」を行いました。北小の卒業生や保護者の方は、周知の行事のことと思いますが、恥ずかしながら私は、これまでの教員生活の中では経験がなく、「筆供養」は聞いたことがあっても「筆供養」は北小にきて初めて知った活動でした。調べてみると、筆供養とは画家や書家を使い古した筆を「筆塚」に納めて供養し、感謝の気持ちを表す行事のことでした。北小の場合には、大山忠作先生のご寄付で昭和48年に作られた「筆塚」に短くなった鉛筆を納めることを通して、学用品に対する感謝の心を育むと同時に、母校を愛する大山先生の深い心情に触れることを目的としています。

今回は、コロナ禍ということもあり、テレビ放送での実施となりました。集会委員会児童による大山先生と筆供養についての説明、各学級で集めた短い鉛筆の「納筆」、大山先生や筆供養に関するクイズなどを行いました。

筆供養を契機として、あらためて、北小の子ども達の生活を振りかえると「落とし物が少ない」ことに気がきました。特に学級での筆記用具の落とし物が少ないのです。これまで私が経験してきた学校では考えられないほどの少なさです。これは間違いなく「筆供養」の成果だと思われます。今回で49回目となる北小ならではのまさに伝統行事。これからも大切に続けていかなければと思いました。



ちょっといい話

～「ありがとう」の言葉の力～

このところの連日の雪。朝、職員は雪かきに追われています。校地内の雪かきはもちろん、校舎前の歩道の雪かきも行っています。先日はお名前はわからなかったのですが、地域の方が校舎前の歩道の雪かきをしてくださいました。ありがとうございました。

昨日も、雪かきをしていると登校してくる子ども達とすれ違いました。「おはよう。」「おはようございます。」朝のあいさつを交わしているとある女の子が「雪かきありがとうございます。」と声を掛けてくれました。子ども達がこんなこと言ってくれるんだ・・・・とっても嬉しい気分になりました。

その気分のまま校舎に戻ってくると、玄関には校舎内であいさつ運動を展開する子ども達がいきました。するとまた「雪かきありがとうございます。」と声を掛けてくれるではありませんか。なんというすばらしい子ども達。普段、感謝の気持ちを言葉にして伝えることは大事だなあと思っただけでもなかなかできないのが現実。北小の子ども達の優しさに触れ、雪かきの疲れが一気に吹っ飛んだようにも思えました。「ありがとう」の言葉には人の心を動かすパワーがあるようにも思えます。子どもから学んで、どんどん感謝の気持ちを「言葉」にして伝えませんか。

